消化管外科，脳神経外科，呼吸器外科，婦人科，乳腺・内分泌外科における周術期患者の特徴

山中玲子[1]，水口真実[2]，横井彩[3]，志村匡代[1]，水谷慎介[4]，森田学[4]

[1]岡山大学病院中央診療施設医療支援歯科治療部，[2]岡山大学病院クラウンブリッジ補綴科，[3]岡山大学病院予防歯科，[4]岡山大学大学院医歯薬学総合研究科予防歯科学分野

【目的】当院周術期管理センター（通称 PERIO）は 2008 年に設立され，多職種で手術予定患者の周術期管理を行っている。歯科部門では，より質の高い周術期医療の実現に貢献することを目指し，周術期口腔機能管理を担当している。本研究の目的は，対象各診療科の患者の特徴を明らかにし，効果的かつ効率的な歯科介入の戦略を検討するうえで有益な知見を得ることとした。

【方法】2012 年以降 PERIO 対象各診療科（消化管外科，脳神経外科，呼吸器外科，婦人科，乳腺・内分泌外科）を受診した最初の患者 30 名ずつ，合計 150 名の患者を抽出した（男/女：49/101，平均年齢：59.9±12.8 歳）。各患者の現在歯数，健全歯数，D 歯数，M 歯数，F 歯数，CPI，義歯の有無，咬合支持の状態（アイヒナーの分類），喫煙・飲酒習慣，一日の歯磨き回数を記録した。各診療科間の比較には，χ^2 検定，一元配置の分散分析と Tukey 法を用い，有意水準は $p<0.05$ とした。

【結果】消化管外科患者では，他の診療科の患者より男性の割合や喫煙・飲酒習慣を有する患者の割合が高かった（$p<0.05$）。また，呼吸器外科を除く他の診療科の患者より平均年齢が高かった（$p<0.05$）。消化管外科患者では乳腺・内分泌外科や脳外科患者と比較して現在歯数，F 歯数が少ない一方，D 歯数が多く，CPI の個人コードが高く，咬合支持域が少ない者の割合が高かった（$p<0.05$）。また，歯磨き回数が少ない傾向にあった。消化管外科患者の口腔内の状態が，その他の診療科の患者よりも不良であることが明らかとなった。今回対象となった消化管外科患者は，全て食道癌患者であり，年齢層が高く，男性が多く，喫煙・飲酒の生活習慣などを有する患者が多かった。これらの因子が，口腔内の状態に影響している可能性がある。

【結論】消化管外科患者ではその他の診療科の患者より，保健指導を含めたより多くの歯科介入が必要であることが確認された。

キーワード（３つ）：周術期口腔機能管理、DMF、CPI

2015 年 5 月 27～29 日
第 64 回日本口腔衛生学会
タイトル 50 字，本文 800 字